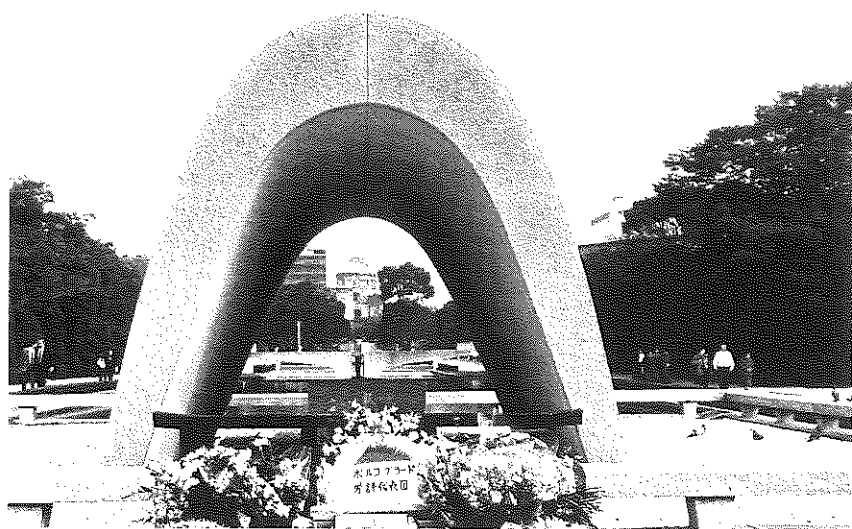


舟入むつみ園

第一特別養護



慰 靈 碑

屋根が落ちてきた

木 本 末 人（七八才）

被 爆 地……東観音町（爆心地より一・一km）・屋内

当時の急性症状……打撲（頭・腰）

家族の死亡……息子

被爆前の家族構成と当時の生活

東観音町で妻と息子と私の三人家族でした。東洋工業の旋盤工として働いていました。当時は、事務がいやで現場の仕事をしていました。

息子は九才で被爆直後死亡しました。妻は家事をしていました。

生活状態は当時としては、楽な生活でした。土曜日の晩には家（高田郡甲立）に帰り、月曜日の朝、国鉄芸備線で米を背負って向洋まで帰っていました。

被爆時の状況

夜勤して家に帰ろうとしたら空襲、空襲と言われ、当分、家に帰れませんでした。解除になり家に

帰り、座敷で煙草を一服していたら「ピカッ」と光り、ドンと音がした後は外が暗くなりました。（家がかくずれ、土けむりだろう）家が動いて鴨居が頭の上に落ちて痛いと思った瞬間、気を失いました。気がつくと屋根が落ち、鴨居が板をおさえて、その下に体がありました。明るくなったのはつて行き、外に出られたので自分は助かったのだと思います。

妻は、前の家でご飯を食べていた時に、頭にガラスが当たり負傷しました。

被爆後の行動と生活

芸備線の甲立の実家に帰り、三ヶ月ほど百姓を手伝い、また広島に出て東雲の農家の離れを借りました。当分のあいだ日雇いをして駅前マーケットで化粧品の小売を暫く営んでいました。大阪の商人と出合つて詐欺にあい、商売に失敗して大借金をしました。失対に勤めていましたが（二五―二六年間）失対がなくなると言われたので早目にやめ、庚午の土建業者に常用で入社し、脳卒中で倒れるまで勤めました。

ホーム入所前後の状況

広島駅裏の槇坪病院に入院していましたが、昭和五七年七月退院して、妻（ユスエ）の介護を受けていましたが、ユスエも病弱で無理ができないため、ホームに入所となり、妻は舟入病院で昭和六〇年九月に死亡しました。毎週土曜日のリハビリ訓練を心待ちにして、段々と良くなったと喜んでいました。車椅子の介助があれば、自分で乗り降りできるようになりました。ホーム内の行事には積極的に

参加し、ありがたいばかりと思っています。

妹といっしょに

藤 本 チエ子（八三才）

被 爆 地……大手町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……打撲（体全体）・ガラスで負傷・下痢・発熱・脱毛・吐気

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私は六人兄弟の長女で、母は既に亡くなっていました（昭和一九年）が、父は山県郡千代田町に弟と一緒に住んでいました。夫は熊谷組（大阪）に勤務していましたが、仕事の関係で出張が多く、家にはいたりいかなかったりの状態でした。熊谷組の前は、宇品の造船所に勤務しており、船大工でした。キリンビールのビールを入れる大きな機器も作ったことがあるそうです。夫が留守がちのこともあり、妹（サトノ）も、伯母の家と私の家を行ったり来たりでよく遊びに来ておりました。

被爆時の状況

原爆投下時の八月六日は、ちょうど妹のサトノは前の晩から私の家に来ており、夫もたまたま家に居り、弟は買い出しに出ていて留守でした。私は朝食の支度をしようと思ひながら、その時は気分が悪く、夫と一緒に台所に座っていました。八時過ぎのこと、ピカッとあたりが光り、すぐドカンと大音響とともに家は崩壊し、私たちは家屋の下敷きになりました。真つ暗で光の方向に抜け出そうと思つても、倒れかかった柱、壁、家財道具が重く体にのしかかり、動くことができません。私の家は、二階建てで、ちょうど運よく段梯子の近くにいたせいでしょうか、二階が落ちてきたにもかかわらず助かったのは、その段梯子が少しの隙間を作ってくれたせいかもしれません。どのくらいの時間気絶していたのかわかりませんが、夫に「チエ子、チエ子」とぶたれているのを感じました。やつと意識を取り戻し、手を動かそうと思つても動かすことができません。目の前の夫は鼻の側から血がほとばしり、腕には五寸釘が木と一緒につきささっており、血だらけの無残な状態でした。やつとの思いで夫は腕にささった釘を抜き、私に手をさしのべてくれ、血だらけの体のまま、私の手を引つ張つてくれました。何とか這い出すことができた私は、夫の「火の手があがるから早く逃げよう」という言葉で動かない手と足をひきずりながら、暗黒の状態から息も絶え絶えに崩壊した我が家から見ても無残な姿で逃れ出ることができたのです。

傷む手と足、そして真黒な体で、私と夫は道端まで出ると、周囲は全て崩壊し、近くにあった日赤だけが崩れずに残っていました。あちらこちらから火の手が上がり、逃げまどう人々の姿がありました

た。どっちに行けば良いのだろうと不安と焦燥感に駆られ茫然とたたずんでいると、私たちの前を兵隊さんらしい人がジープに乗って来られ、二人を乗せてくれました。お願いして、知り合いの（御用達の人）青木さんが宇品に住んでおられたので、そこまで連れて行ってもらいました。しかし、青木さんの家も、爆風でガラスは全部こわれ、本人も不在でした。防空壕があるのを知っていたので、その中に入れてもらおうと思っていたら、側に誰か知らない人が寄って来て、「被災者は似島に収容します」と言って、私たちを船に乗せ、似島の検疫所にその日（八月六日）のうちに連れて行かれました。似島には既にたくさんの方の被災者が収容されており、敷かれたむしろの上には、目を覆うような状態の人たちで一杯でした。学生も道路を作るために家を壊すとかで、かり出されていました。

前後もわからない、ひどい火傷で苦しんでいる人、「水をくれ!!」と息も絶え絶えにもがいている人など、本当に地獄絵を見るような有様でした。「起こしてくれ!! 座りたい!!」やつと座らせてもらっても長くは座ることもできず、そのまま息絶えた人。次から次へと死んで行く人たちの中で、私は支給されたむすびを食べることはできませんでした。

被爆後の行動と生活

似島の検疫所には、二三日いたと思います。主人の弟が誰かに知らせてもらったらしく迎えに来てくれました。似島から帰り、生活の拠点もきまらないまま悩んでいましたところ、中国新聞に勤務していた従兄弟のすすめで、暫くの間青木さんの家でお世話になることになりました。その後、預金通帳のNoを控えていたおかげで銀行からお金を引き出すことができ、船越町に家を借りて住むことが

できました。しかし、当時の広島の状態では医者
の診断もままならず、手や足が動かないまま、その上、
下痢、発熱、吐気が続き、髪の毛も抜けてしまうとい
う状態で、寝たり起きたりの毎日で、三度の食事も
満足にとれない日が続きました。八月の下旬頃、
意を決して、夫と一緒に別府の温泉に治療に行くこ
とにいたしました。二ヶ月くらい滞在し、手が少し
動くようになり、足も跛（ちんば）ではありましたが、
少し歩けるようになったので、広島に帰って来
ました。船越に別府から帰って来てからの夫の体調
は、被爆の影響でしょうか、ひどく悪くなり、食べ
たらすぐ下痢という症状が続き、日赤受診治療を続
けておりました。その後、軽快し元気をとり戻し、
愛媛県の実家に度々行くようになっておりました。
私は相変わらず体調は悪く、特に夫との生活全
ての面で一緒に生活できない状態になってしまい、
離婚という形になりました。その後、妹（サトノ）
と共同生活することになり、山県郡千代田町に住



む弟から、米や仕送りを受けながら生活をいたしました。体調が少し良くなってからは、食堂（一杯のみ屋）をしたり、病院の賄婦をしたり、付添婦をしたりしたこともあります。やはり無理であったようで、体は常にしんどく、不眠も続き、仕事を続けられる状態ではなくなり、妹（サトノ）も病弱なため、一緒に生活することができなくなり、たびたび入院ということになってしまいました。妹（サトノ）は、その後、ほとんど入院生活を続けることになるわけですが、私も肺癌という診断で結核療養所に半年くらい、その後、鉄道病院、宇品の個人病院、原爆病院、力田病院といろいろな病院を転々といえました。妹（サトノ）と二人で別府へ二年くらい養生に行ったこともあります。

同じホームで、余生を妹と一緒に生活したいと切望し、希望を叶えていただくことができました。いつ、原爆症が出るかわからないという不安に駆られながらも、よくこれまで生きてこられたものだと、つくづく不思議に思っています。現在も右半身の疼痛、シビレ感がありますが、杖を使って歩行できる状態です。同じ苦しみや悲しみを受けた人たちと肩を寄せ合い、暖かい穏やかな心で、一日一日を大切に生きられたら、と毎日を感謝の気持ちで送っている私です。

それはひどいにおいだった

小早川 キクエ（八五才）

被爆地……牛田早稲田（爆心地より二・五km）・屋内

当時の急性症状……負傷・常に倦怠感・暈眩

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

牛田早稲田に住み農業をしていました。

夫、私、長男、次男、長女の五人家族でした。長男（当時一七才）は志願兵で満州に行っていました。次男は日本精工に勤めており、夫婦二人で牛二頭を飼ひ百姓をしていました。

被爆時の状況

次男が夜勤明けで八時頃帰宅したため、朝食を食べさせようとしたくをし座ったとたん、桜の花のような色をした光が走りました。ワーンと大きな音がしてひっくり返りました。すぐ後、暗くなり気を失いました。気がつくと、天井が抜け家中メチャメチャになっていました。爆風で家具等は飛んで

しまっていたが、幸いなことにケガはありませんでした。

一方夫は、牛二頭を連れ牛田の山に行っていました。牛は腹を焼かれ興奮し、綱を切って自力で牛舎へ戻っていました（牛舎は山陰になっていたため壊れず残っていた）が二〇日くらいで死んでしまいました。

夫は首の後に少し火傷をしていたが、残っていた天ぷら油を塗り治療をしました。医者に行っても薬もなく、治療はしてもらえないため、その後も天ぷら油の治療を続けました。

次男、長女も牛田で被爆したが特にケガはありませんでした。

実家の両親も舟入本町で被爆、父親は背中に火傷、五日市に行き手当を受けたが二〇日後に死亡、傷口はうじがわいていました。

母親は家の下敷きになったが打撲した程度ですみました。昭和三八年、八五才で死亡。

被爆後の行動と生活

被爆後、家族四人で牛田に住んでいました。夫は市役所からの要請があり死体処理の手伝いに出ていました。夫から私にも死体処理の手伝いをするよう勧められ、一緒に手伝っていました。

牛田の山に死体を捜しに行き、それを担架で運び集め、山のように積みあげ、壊れた家の廃材を集めたりして焼いていました。それはひどいにおいでした。そして焼いた死体の骨を拾ったりする仕事が一年くらい続きました。

長男は昭和二〇年一〇月一〇日、満州で死亡したとの公報を受けました。

娘は夫とけんかし、家を出て熊野で奉公しましたが親の知らぬ間に結婚していて、昭和二四年一月一五日病気で死亡しました。

夫は仕事をせず、酒を飲んで暴力をふるい、それが益々ひどくなり身の危険を感じ実家に逃げ帰り、家庭裁判所に依頼し、昭和二三年離婚をしました。

次男は夫の姓になっていましたが、裁判所に頼み昭和三六年籍を抜いてもらい、私の籍に入れ母子で暮らすようになりました。私は人夫をし、息子は今までの仕事を辞めて三菱の江波工場へ勤め、その後結婚をしました。三年後に三菱を退職、西警察署に勤めましたが犯人を捕まえ格闘し、梯子段からつきとばされ腰をケガし、今も入院をくり返しています。

ホーム入所前後の状況

離婚後ずっと人夫をしていました。昭和五五年頃より神崎小学校の掃除婦の仕事に就くが、胸がしんどくなり階段を上るのが苦痛になり舟入病院受診、昭和五九年六月狭心症のため入院となりました。二年間入院生活が続け、昭和六一年六月原爆養護ホームむつみ園に入所いたしました。

現在の病名、狭心症・閉塞性肺疾患、定期回診、投薬を受け健康管理をしています。狭心症については発作時、医師の指示により舌下錠ニトロールを使用しています。

むつみ園に入所してからは、精神的に落ち着き、ここに入って良かったと話しています。

息子夫婦は二人とも腰が悪く入院をくり返していますが、孫娘が二人居り、二人とも結婚し、幸せに暮らしていると嬉しそうに話しています。

似島に収容されて

竹 安 ヨシミ（七七才）

被 爆 地……皆実町（爆心地より二・三km）・屋外
当時の急性症状……火傷（左喉・左肩）・脱毛（三分一に減る）・歯ぐきの出血（少量）・吐気（少し）
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

河原町二二三―一八番地にて、四人家族でした。夫はルソン島に飛行機の整備員として出征中。
長男（小学校五年生）と長女（小学校三年生）は山県郡に疎開中。（二〇年四月三日から疎開していました。）

そのため、私は一人暮らしとなり、皆実町の味日本の会社内にあるウツミという会社に勤務していました。

公報は入っていませんでしたが主人、薫（三九才）は五月二二日に戦死していました。

被爆時の状況

その日、朝七時頃、河原町の家を出て、舟入本町から電車に乗り出勤。たぶん、二階建てだったと思いますが、その一階のボイラー室の隣りの部屋の窓側に立っていて、被爆しました。幸いにガラス窓には紙が張ってあり、ガラスは体にささっていませんでした。

服装は、白の開衿シャツの半袖と国防色のズボンでした。

八時一五分、マッチの小箱に火が入ったような、ボーッというような音がして、同時に煙幕のような臭いのするものが、むっと顔に来て左側の喉のあたりから左肩、左肘から前腕、右手の甲などを火傷しました。

白のシャツは焦げてはいましたが、焼けてはいませんでした。国防色のズボンはボロが下がったようにボロボロになっていましたが、足の皮膚は幸いにして、何の変化もありませんでした。

被爆後の行動と生活

会社から門を出る時に役員さんが体の状態を見ていて、皆実小学校は潰れてしまったので、陸軍病院（現在、県病院）に行くよう指示を受けました。

陸軍病院で白いクスリを塗ってもらい、一二時過ぎごろ帰宅するために比治山橋の所まで行くと、河原町方面は火の海であることを知らされ、通りかかったトラックに乗せられて宇品港まで行き、似島の病院に収容をされました。

六日の夜には、喉の所の火傷が顔一面に広がってしまい、目が見えなくなりました。また、両腕は水泡ができ、右手指は五倍くらいに膨れました。頭髮は三分の一に減りました。

似島の病院では、一日に二回の牛乳、三時にはミカンの缶詰などをいただき、水は一日に牛乳瓶一本分が与えられました。軽傷、重傷と分けられ、私は重傷で二病棟に収容され、そこで、励ましの言葉や勇気づけをもらっていました。そこには一二日までいて、その後、廿日市の小学校に移されました。

二六日には目が開きました。二八日に家に連絡がつき、夫の兄に連れられて姑のいる下深川に帰り約半年滞在しました。そこでの水汲みがリハビリになり、手も上がるようになったと思います。

ホーム入所前後の状況

昭和二〇年の一〇月に、子ども二人が下深川に来て一緒に生活をはじめ、その年末に東蟹屋のおばの所に生活の居を移しました。

その後、昭和二二年六月に夫がフィリピンのルソン島で戦死したとの公報を受けました。

それから女手一つで働きながら子どもを育てました。

昭和六一年頃には己斐本町二丁目一五番二七号に暮らしていました。

昭和六一年七月二六日に安芸郡府中町にある広島静養院に足・腰が少し悪くなったので入院していました、あまり変化が見られず、私の原爆養護ホーム入所希望がかなえられ、入所しました。

ホームでは歩行器を使用しています。

目に入るものすべてが

森

アイ（八七才）

被爆地……羽衣町（爆心地より一・七km）・屋内

当時の急性症状……火傷（背中）・打撲（右半身）

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

私が二八才の時に夫と再婚しました。先妻との間の子どもが三人いて（長男八才、長女七才、次男五才）、皆やさしい子どもたちに成長してくれました。

被爆前は、先妻の上二人の子どもたちは家を出て別に生活しており、次男は兵隊に行っていました。夫と私の間に生まれた三人の子どもと夫婦の五人家族でした。

次女（一七才）と三男（一五才）は、毎日勤労奉仕に出ており、主人は中国塗装に勤務しており、末娘は一〇才で小学校、私は吉島配給所の伝票整理に毎日行っていました。

被爆時の状況

八月六日の朝、いつもと変わりなくそれぞれ出かけて行き、私は配給事務所に行き、伝票整理を始めてすぐのことでした。バツと光ったと思うと何が何やらわからず、反射的に外に走り出ていました。すごい爆風でした。私は夢中で自宅へ走り帰りましたが、自宅近くは全て壊れて燃えていました。気がつくと着衣の背中に穴があき火傷をしていて、右半身がとても痛く感じましたが、どこで打ったのか覚えていません。夫も右手を怪我しただけで自宅近くで会い、子どもたちの事が気になり、探しに行っていると吉島大橋の所で末娘に会いました。娘も肩に血がにじんでいる程度でした。目に入るものすべてが……あの情景が本当に地獄というのでしょうか。

被爆後の行動と生活

みんなが三菱の埋め立て地に集まっていて、私たちもそこへ行き夜を明かし、おにぎりをもらい空腹をしのぎました。勤労奉仕に出ていた二人の子どもはあちらこちらと探してまわりましたが行方わからないままです。

四日目に佐伯郡のみのちの弟の所へ歩いて行き、二週間程して広島の己斐の叔母の家が無事だったので間借りして生活を始めました。夫も中国塗装に勤務し、末娘も学校に行っていました。被爆後より病弱になり、三年後に白血病で死亡しました。先妻の子ども上二人も次々に死亡して私も死にたいと思っていました。その後、兵隊より息子が帰り同居しましたが、結婚して家を出て行き、また叔母

も東京の子どもの所へ行つてしまい、昭和四一年、夫が死亡するまで二人の生活が続き、以後一人で生活していました。時々息子が顔を見せに来てくれるくらいでした。

ホーム入所前後の状況

被爆時右半身を痛打しているため、右半身が痛く思うように動けず、また貧血、神経痛等で昭和六年八月に舟入病院へ入院しました。義理の息子も病弱で、また私の兄弟五人のうち三人死亡しており、残る末弟は可部に住んでいます。同居は無理なため、息子と甥とで相談のうえ、昭和六三年一月にホームに入所しました。

入所時は歩行器を使用していましたが、最近では体の動きも悪くなり、ベッドより移動が困難になっています。日中も寝ていることが多くなりましたが、義理の息子も面会に来てくれるし、寮母さんたちも本当に心身になってお世話して下さい、今では安心して生活できることを感謝しています。私が話せるうちに聞いてもらって良かったです。ありがとうございました。

右腕をガラスで切つて

藤 本 サトノ（七八才）

被 爆 地……大手町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……打撲（全身）・ガラスで負傷・下痢・発熱・脱毛・吐気
家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

荒神町で伯母と伯母の娘、私、三人で仕立物で生計を維持しておりました。当時は仕立物といつても、和服を仕立替し、モンペとその上に着る物が多く手縫いでしていました。また、自分は子どもの頃から体が弱かったため病院通いが多く、食料も配給等でなかなか思うように手に入らず、苦しい生活をしておりました。

被爆時の状況

八月六日は大手町九丁目、姉夫婦宅にて被爆をいたしました。

前夜、姉宅に泊まり、朝食を準備するため、姉と一緒に台所におりました。義兄は庭に降り、何か

していたらしく屋外で被爆をいたしました。一瞬にて家屋の下敷きになり、身動きができず、悪臭がし、目の前が真黒になり何も見えず、そのうち明るくなったと思つたら廻りが火の海となりました。一時は氣を失つて何にもわからない状態でした。氣が付くと、身内の者と一緒にいました。後で聞くには似島に連れて行かれたらしく、全く記憶にありません。伯母と伯母の娘は荒神町で被爆し、二・三年後に肺結核で死亡したと聞きました。

被爆後の行動と生活

家屋の下敷きになった時、右腕をガラスで切つたので手当を申し出ましたが受け入れられず、自分で長期（一年）にわたり治療をいたしました。その後遺症で血液の循環が悪く、現在も痛みます。被爆後、暫くし脱毛（全身）、下痢、吐氣がありました（四・五日）。姉夫婦と一緒に田舎に身を寄せるが、体調が悪くなり一年後、広島に戻つて来ました。激腹痛のため島外科に入院。開腹手術をしたが原因不明のまま黒色パイプ二本を入れたまま縫合先だけ出したままでありました。黒血が多量に出たそうです。日赤にも通院。再び手術すると言われたが、自分でリパソールとピンセットを買い求め、毎日ガーゼを取り替え、入浴は禁じられていたが、お椀のようなものをかぶせ、水が入らないようにし四、五年かかりましたが、自力で治しました。その後、いろいろ発病。瀬野川病院へ三年入院。左片肺・左肋骨六本を取りました。大病以後、菌も出なくなり、生活の事もあり買い出しを初め、米・魚・干物などヤミヤのまねごともしました。姉とは四〇年前から生活を共にしていました。

ホーム入所前後の状況

姉と一緒に家も借りて生活していたが、体が弱く毎日の通院でバスの中で腰を打ち、（尾骨骨折をしました。弟たちは一緒に生活しようと言ってくれるものの、家族構成・住居、経済的な事もあり、自分の体の事を考えた結果、入所希望しました。

毎日、安心して生活できることを本当に喜んでいます。

頭髮は、生えるには生えたが全体的にうすく、常時帽子をかぶっています。腰痛はしかたがないとあきらめています。右腕のガラスで切ったあとは何本にも段になっています。

衛兵交代の時刻に

森 秀 男（七六才）

被 爆 地……牛田町（爆心地より二・五km）・屋外

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

妻と子ども一人の三人で暮らし、長女は学童疎開しておりました。私は宇品船舶指令部、運輸部の守衛として勤めていました。

被爆時の状況

八時一五分、表門で衛兵交代時刻のため、約二〇名の兵隊が整列をしていました。その時、空襲警報の解除がされているのに敵機が一機、飛来して来ました。みんな不信に思って上空を見上げ、来機の独特のエンジン音に引き付かれていたその一瞬、強く光り地面が引き上げられるようなすごい圧力とともに、今度はぐっと押さえ付けられるような不気味な風と砂ほこりが舞いあがったので、整列していた兵隊は守衛所内の通路に駆け込みました。群集心理というのか、みんな人が逃げ込む方向へと一緒に駆け込みました。その時、強い爆風を受け、全員海岸へ吹き飛ばされました。

守衛所の見張台に上って四方を見ましたが、己斐方面の山の中に炎が上がり燃えていました。（これはガソリンの貯蔵所が山の中にあつたのが爆発したのと思いました。）東西にわたって家屋が倒れて見通しができるようになっていました。

逃げて来る被爆者は皆、自分の所に爆弾が落ちたと言うので、果たしてどこに何が落ちたのかわからなくなりました。私たちは皆実町の瓦斯会社のタンクが爆発したのかと思っていました。

幸いにも私は怪我一つしていませんでした。屋内にいた者は、ガラスの破片が身体中にささり大変

でした。すぐ、牛田の家に向かいましたが、当たり一面火の海で、自転車は御幸橋のところにある専売公社までしか使用できず、そこからは歩きました。川辺には水を求めて集まった人がいっぱいいて、倒れた人の身体からでた油が土にじみでていました。水を欲しがっても飲ませてはいけないうと聞いていたので、どうする事もできませんでした。牛田に着くと、自分の家だけ屋根が吹き飛んで残っていました。

その日の朝は、妻と子どもと三人で家を出て、途中で自分は宇品へ妻と子どもは買い出しのため戸坂へと別れていたので、すぐ戸坂の親戚へ行きました。光線を受けた時、背中に荷物を背負っていたのが幸いとなつたらしく、軽い火傷だけで元気でした。

被爆後の行動と生活

次の日からは、その親戚から宇品へ通いました。宇品線の鉄道で運ばれる負傷者に石けんの材料として保管してあったやしの実の油をぬつたりして救護にあたり、死亡した人たちは宇品の埋め立地へ運び、そんな仕事が一〇日くらい続きました。

その後は、部隊が解散になりましたが、昭和二二年六月まで宇品船舶司令部に勤務しました。

その後は、大須賀町官有三一番地に住まいを移し、もともと自分の職業としていた理髪店を開店し、頑張つて働きました。そのうち、子どもは独立し、妻が病気になる入退院をくり返し、仕事をしながら九年間看病をしました。昭和五九年一二月に亡くなり、一人になってしまいました。そのため、昭和六一年より中区基町の市営住宅に入居しました。

ホーム入所前後の状況

入居後、間もなく体調をくずし、原爆病院、鉄道病院、また原爆病院と五回の入退院をくりかえしていましたが、主治医より病状が落ち着き退院を勧められ、子どもにも相談し、ホームに入所となり現在に至っています。

独り暮らしの生活ではいつも手間のいらぬ物ばかり買って食べるので栄養不足になり、病気を患っている身体でもあり、いつ変調があるかわからず、とても不安な毎日でした。今はこうして寮母さんの世話を受け、本当に幸せなことと思います。少しでも健康をとりもどし、もう一度社会に帰りたいと願っております。